

平成 18 (2006) 年 1 月 12 日

日本英学史学会 中国・四国支部

ニューズレター

No.45

ご 挨拶

竹 中 龍 範

新年明けましておめでとうございます。会員の皆さまには清々しい新春をお迎えのことと存じます。昨 2005 年は、一昨年が続いての異常気象に加え、児童の殺害事件や列車の大事故、建築物の偽装・手抜きが発覚等々、陰惨な、悲劇的な事件・事故が次々に報ぜられました。今年こそは上昇志向の一年になればと願っております。

さいわい、わが中国・四国支部にとっての 2005 年は、総会、研究例会については定例どおり、5 月、12 月に開催することができ、それぞれ実り多い行事であったことは本ニューズレターにご報告いただいたとおりです。紀要『英學史論叢』は、刊行がやや遅れはしましたが、従前どおりの本数とレベルとを維持できたかといささか自負しております。

支部紀要については、現在、東日本支部、北陸支部がそれぞれ『東日本英学史研究』、『北陸英学史研究』を刊行中ですが、関西支部も『関西英学史研究』創刊号を昨年 12 月に刊行され、九州支部の方でも研究誌創刊をご検討中と伺っております。この点、わが支部は、広島支部時代より通算して、その号数すでに 28 を数えております。厳しい審査を経ての論考掲載という方針を堅持してはおりますが、まずは研究ノートとしてご発表いただき、他の会員より資料提供やアドバイスを受けて、研究論考としてまとめていただく形もありますので、ふるってご投稿いただければと思います。

なお、昨秋、福岡大学で開催された日本英学史学会全国大会の総会にて、支部活動の支援策として、各支部に対し、本部所属会員数に応じた経済的支援が行われることが承認されました。本部の方に未入会の皆さまにはこれを機にぜひ本部会員にもご登録ください、ご研究の幅をお拓げいただいて、さらに、それによって支部に対する支援拡大におつなげいただければ幸いです。また、新会員の勧誘にもご協力のほどお願い申し上げます。

(中国・四国支部長)

平成 17 年度 第 2 回 (通算 53 回) 支部研究例会 (岡山例会)



六高記念館前にて

平成 17 年度第 2 回支部研究例会報告

平成 17 年度第 2 回研究例会は去る 12 月 3 日 (土) 午後 2 時より、岡山県立岡山朝日高等学校会議室を会場として行なわれました。運営全般にわたり、理事の能登原昭夫先生には多大なるご尽力を賜りました。会場校・朝日高校の関係者の方々には一方ならぬご協力を賜り、厚く御礼申し上げます。ご講演、ご発表を頂いた先生方はもとより、地元岡山の会員や参加者の皆様方のお陰をもちまして、例会参加者 35 名の大盛会となりました。

以下のプログラムすべてにわたり大変充実した会となりました。心より御礼申し上げます。

◇ ◇ ◇

日時： 平成 17 年 12 月 3 日 (土)

午後 1 時～午後 5 時 30 分

場所： 岡山県立岡山朝日高等学校

〒703-8278 岡山市古京町 2-2-21

Tel: (086) 272-1271 (代表)

<<< 受付 (12:30-) >>>

開会挨拶 (13:00-13:10) 支部長 竹中龍範

講演 (13:10-14:10)

「ガントレット氏と岡山」

濱田栄夫 (山陽学園大学教授)

司会および講師紹介 能登原昭夫

研究発表 (14:20-16:00)

(1) 「中四国英学史話 (その 1) —伊藤俊介と高橋顯正の英学修業」

佐光昭二 (本学会会員)

司会 竹中龍範

(2) 「津山英学の源流をさぐる—久原洪哉とウイリアム・ウィリスの出会いについて」

山田宗八 (山田共学道場)

司会 小篠敏明

英学資料見学 (16:10-17:20)

説明 (能登原昭夫)

岡山朝日高校資料館および六高記念館

閉会挨拶 (17:20-17:30) 副支部長 田中正道

<<< 忘年懇親会 (18:00-) >>>

会場：瀬戸内料理「飛鳥」3F (岡山駅西口)



参加者から寄せられたご感想を紹介します。

講演「ガントレット氏と岡山」



濱田栄夫先生

- ◆興味深くお聞きしました。院生時代に *Teaching English as a Foreign Language* (1957) by J.O. Gauntlett をテキストに勉強しました。こちらのガントレットさんは弟さんか、子供さんか知りたかったです。エスペラント語の一般性がないのは人造語のせいでしょうか。
- ◆広島支部が中国・四国支部に拡大し、支部例会がますます充実してきたことを身にしみて感じました。すばらしい introduction をして頂きました。ガントレットは山口、岡山に関連があるので、よい講演有意義でした。
- ◆英語教育史の分野では余り語られることのないガントレットの、特にエスペラント語の側面についてお話を伺うことができ、また一步ガントレット像に迫ることができました。有難うございました。
- ◆ガントレットの実像がよく浮き彫りになった講演だった。
- ◆岡山県にエスペラント語に関わる人がいたことを知って、知ることができてよかった。
- ◆先の河口先生発表の「山口における Edward Gauntlett」と今回の講演で、松村先生の言われる、点から線へ、線から面への研究が成り立ったのではないかと。それこそ中国・四国支部の意味があるのでは。
- ◆ガントレット氏のエスペラント、国際結婚など、日本で国際的存在として素晴らしい方の御紹介に大いに啓発されました。特にその活躍の内容のみならず、周辺の人々などのため・よこのつながり

を明らかにされた点で、耳学問のありがたさに頭をたれました。私個人としては、ハーンの研究と重なる話が多く、いろいろ研究のヒントを得ました。有難うございました。

研究発表「中四国英学史話（その1） —伊藤俊介と高橋顯正の英学修業—



佐光昭二先生

- ◆安政年間前の文化年間にすでに『語林大成』や『興学小笈』などの英和、和英辞典が出ているのでそれらが英語修養に用いられなかったのかどうか、教科書としては？（寺田氏と同じ質問）
- ◆中国、四国のつながりが強化されるための大テーマにとりくんで頂きました。
- ◆明治期の日本を動かした人々にとっての英学修業の持つ意味について考えながら興味深く伺いました。伊藤にとっての英学とは何であったのかの分析などもお聞きしたかったように思いました。
- ◆伊藤と高橋の英語修業の特徴を対比して語ってもらくと分かり易い発表になったのでは？
- ◆蘭学から英学へと移行する時点での「さむらい」達の姿が非常に印象的で、日本を文明開化させた人々の若き日の姿に多大な感銘をうけました。ありがとうございました。
- ◆若き日の伊藤博文がどのように英語を学んだかを明らかにする、大変興味深いご発表でした。「会読」が伝統的に重要な学習法であったことを改めて知るとともに、当時の英学への取り組みはまさに「稽古」であったのだなと感じました。また、様々な資料を読み解くことで本質に迫る、英学史研究法の真髄を見せて頂いたように思います。有難うございました。

研究発表「津山英学の源流をさぐる—久原洪哉と
ウィリアム・ウィリスの出会いについて」



山田宗八先生

- ◆素晴らしい発表で熱が込められ「感服した！」(小泉チルドレンの一人と間違えられては困るが...)。カテキズムは中世の教理問答であるが、古くソクラテスの時代までさかのぼる。現今の問答法の実践にどう生かしていくか。
- ◆熱意あふれるご研究に力強さを感じました。医学史研究はわが国で盛んですので、その方面の調査もごらんになればと存じます。ウィリスとはおどろき入りました。
- ◆資料を博搜されての御発表でいろいろ面白い情報を御提供していただきましたが、テーマをもう少し絞りこんで調べられるとよかったのではないのでしょうか。その方が御研究の継続につながり易いように思います。
- ◆英学の歴史を是非さらに研究を深めて下さい。
- ◆すばらしい！がんばって！
- ◆源流を求めて、すごいエネルギーに感心しました。
- ◆ぼう大な資料の発掘に費やされた意欲と熱意、実行力に圧倒されました。「青洲の妻」を思わせる殿様の姫に行われた乳癌にしばられたウィリスの存在を浮き彫りにされた、視点のよさにより、幅広い資料が一点に収斂される見事さに感心いたしました。今後の御研究の御発展をお祈りいたします。ありがとうございました。
- ◆「能登原チルドレン」の一人である山田先生のご発表によって、津山英学の系譜をより身近に感じることができました。また、『英吉利文典』の復刻のご苦勞や、それを用いて道場の教え子に指導していらっしゃる先生のアツいお姿に感銘を覚えました。

英学資料見学

(岡山朝日高校資料館、および六高記念館)



能登原昭夫先生による解説

- ◆旧制6高出身の俊英たちの御魂に衷心から哀悼の意を捧げる。生きておられれば90才前後の方々であろう。生きておられれば現代日本の社会の荒廃をどんな思いで見つめられるであろうか。
- ◆ともに感銘深いものでした。仁科博士が卒業生とは知りませんでした。
- ◆朝日高、六高とそれぞれ伝統を感じさせる見学会で例会のしめくりとして充実した時間となりました。
- ◆Wonderful!
- ◆歴史の厚みを感じます。
- ◆能登原先生の行き届いた御配慮のおかげで、ナンバースクールの伝統の継承を実感いたしました。戦艦大和の重森大尉の肖像を囲む、フィリピン、南太平洋で20代の有為の青年の死が、胸に迫ります。湯川先生の書、文化人の葉書など、伝統の重さを感じ、また若い高校生の寮生活、食堂風景、黒マント姿など、なつかしい風景が楽しい訪問でした。



六高記念館資料室にて

例会全体について

◆最近にない素晴らしい学会であったと思う。能登原先生をはじめ関係された皆様に多謝！来年は津山あたりで開いてはどうか。期日ももう少し早目にできないものかどうか。

◆充実したすばらしい例会でした。次の例会がこれを越えることをめざしても大変でしょう。ありがとうございました。

◆とても見事な運営！

◆今日とても楽しく参加できました。

◆中・四国支部となった実りが、すばらしい形で実った会で、研究発表の充実、及び人物（研究者）

の発掘紹介の場となり、大成功であったと思います。参加者の多さが、盛会の力の勢いを感じました。

◆すべて非常に中味の濃い発表、充実したもの。特に津山洋学は日本の幕末→明治→現代に結びつく原点と見た！今後の研究発表を祈る！

◆とても充実した一日でした。密度の濃い例会はもちろん、懇親会に20名もの参加があり、大いに盛り上がりました。岡山勢のパワーを感じます。こうした研究熱が中国・四国の各地でより一層高まることが、わが支部の発展につながると思います。共に大いに研鑽を積み続けたいものです。



中国・四国支部事務局より

『英學史論叢』第9号原稿募集

支部研究紀要『英学史論叢』第9号の刊行に向けて、会員の皆様の積極的なご投稿をお待ちしております。研究論考、英学史随想、英学史時評、書評等、多数のご応募をお願いいたします。送り先は事務局まで（連絡先は最終ページ）。

投稿の申込締切は、平成18年1月31日（火）、
原稿の締切は、平成18年2月20日（月）、いずれも消印有効です。

執筆要領は以下をご参照下さい。なお、標準書式については、『英学史論叢』第8号p.69の図もあわせてご参照ください。

『英學史論叢』執筆要領

・『英学史論叢』に載録するものは研究論考およびその他のものとする。いずれも未発表のものに限る。

・研究論考、その他のものとも、提出されたものをそのまま複写印刷するものとする。手書き、タイプライターやワープロによる印刷など、いずれもB5判用紙を用い、上下左右に2.0～2.5cm程度の余白をとった完全原稿を提出するものとし、執筆者による校正は行わない。用紙は白紙を用いるものとし、原稿用紙等罫線のはいつたものは受理しないことがある。

・研究論考は日本英学史学会中国・四国支部研究例会、日本英学史学会本部月例会および年次大会、ならびに他支部研究例会における口頭発表をまとめたものとする。これによらない投稿論文も受理することがある。いずれも正副3通を提出し、編集委員会の査読を経て掲載の可否、書き直し等を決定するものとする。なお、

編集委員会は必要に応じて編集委員以外の会員に査読を委嘱することができる。

・研究論考は参考文献・資料・図版等を含め、8ページ以内とする。

・その他のものについては、英学史随想、英学史時評、新刊書評・紹介等とする。これについては会員の投稿および事務局・編集部の執筆依頼によるものとする。なお、新刊書評・紹介は日本英学史学会中国・四国支部会員の著書ならびに中国・四国支部の活動に関わる著作を取り上げるものとする。英学史随想、英学史時評、新刊書評・紹介等、いずれも原則として2ページ以内とする。

『英學史論叢』標準書式

・『英学史論叢』投稿原稿は別に定める執筆要領に従うものとするが、さらに次の書式に従うことが望ましい。

・用紙はB5判白紙を用い、上部に25mm、下部および左右に20mm、それぞれ余白をとる。

・本文の文字の大きさは9ポイントないし10ポイントとし、1行あたり38文字、1ページ38行を標準とする。

・本文第1ページに8行分をとって論文タイトル、執筆者名を記す。論文タイトルは4倍角文字ないし18～20ポイント文字を使用し、中央に置く。執筆者名は本文と同じ大きさの文字を用いて、右に寄せて記す。なお、論文末に、右に寄せて、執筆者の所属をカッコに入れて示すこととする。

・本文中の見出しについては1行アキとし、番号を付して太字、あるいはゴチとするか、下線を施して見やすくする。

・注は脚注、尾注のいずれも可とするが、本文中に右肩数字によって注のあることを明記する。

・参考文献、引用文献は論文末に一括して示す。

◆研究発表者を募集します

来年度第1回研究例会は、5月下旬に広島市内で開催の予定です。例会での発表者を募集します。研究発表（口頭発表30分・質疑応答20分・計50分）をご希望の方は、事務局へご連絡ください。特に若い会員の皆様の積極的なご発表をお願いいたします。

◆ニューズレター原稿募集！

英学史にまつわる「エッセイ」「研究メモ」「読書ノート」などの原稿をお寄せください。いずれも400～800字程度。電子メールまたはワープロ印字原稿を事務局までお送りください。次号以降のニューズレターに掲載させていただきます。

英学史研究の「裾野」を広げるため、多数の皆様のご協力をお願いいたします。

◆会員名簿について

支部会員名簿平成18年版を準備中です。年度末のご異動につきまして、事務局へご連絡くだされば幸いです。次回例会時に発行予定です。

◆皆様の研究情報をお寄せください

会員の皆様の英学史研究に関する新刊、発表論文、講演、研究発表、市民講座、雑誌記事などの情報をお寄せください。ニューズレターでご紹介するとともに、次回以降の研究例会企画の参考にさせていただきます。

◆会費納入のお礼とお願い

すでに多くの皆様より今年度の会費をご納入いただきました。ご協力に厚くお礼申し上げます。なお、これからお振込みの方は、一般3,000円、学生（院生を含む）2,000円をご納入くださいますようお願い申し上げます。（今年度中は、口座名は旧名称の「広島支部」のままです。ご了承ください。）

（口座番号） 01360-9-43877
（加入者名称） 日本英学史学会広島支部

◆訃報

中野訓兆先生 平成17年9月30日にご逝去なさいました。先生のご冥福を心よりお祈りいたします。

日本英学史学会 本部・他支部の動き

◆関西支部紀要創刊

『関西英学史研究』創刊号が発刊されました（2005年12月）。A4判72ページ。内容は、巻頭の北垣宗治支部長「『関西英学史研究』創刊に寄せて」、西岡淑雄会員による「機関誌発刊に寄せて」に続き、論文6点。以下執筆者名と論文名です。

佐光昭二「何禮之の大坂私塾について」、吉永武弘「徳川頼倫と南方熊楠の出会い：ロンドンにおけ

る紀州出身者の集いとその日付問題」、大西俊男「ガーター・ミッション横浜到着までとA・B・ミットフォード」、村瀬寿代「明治初期の『一六休み』をめぐる問題—お雇い教師と文部省の対立」、吉田芳輝「『南方熊楠のフロックコート』について：『三好から貰ったフロックコート』伝説の考証」、岩男久仁子「『イソップ寓話』に表れる『自由』の概念」。

◆『日本英学史学会報』No.108発行

日本英学史学会（本部）の学会報が発行されました（2006年1月1日）。内容は、[史に聴けば(10)]西岡淑雄「古新聞の山に囲まれて」、[英学史散策]山下英一「グリフィスが使った『和英語林集成』」、堀孝彦「“アジアのなかの九州”新博物館巡り—いま再び新たな開国を」、[学会と人—そのとき(9)]遠藤智夫「歴代会長との邂逅」、酒井健治郎「第42回全国大会を顧みて」ほか。

* * *

日本英学史学会（本部）への入会をご希望の方は支部事務局までお問い合わせください。本部のホームページにも詳しい案内が掲載されています。

<http://www.tokyo-kasei.ac.jp/~shinoda/eigakushi/>

<<広島英学史の周辺(11)>>

▼会員の皆様から多くの研究物を頂戴し、いつも刺激を与えて頂いています。この場を借りて御礼申し上げます。▼寺田芳徳先生「佐伯好郎博士—英学者の側面」、松村幹男先生「広島英語教育研究所とその活動—終戦前12年の軌跡」。いずれも10月に福岡で開催された全国大会のご発表資料です。▼竹中龍範先生「明治後期公立中学校における英語教育—香川県の場合」四国英語教育学会『紀要』25（2005年11月）、および『教室英語』考（竹中千鶴先生との共著）松畑熙一先生退官記念論文集編集委員会編『英語教育実践学』（開隆堂出版、2005）。地域の視点の重要性や、日本の独自性や先進性に改めて目を開かされます。▼風呂鞆先生より「ラフカディオ・ハーンの家」ニュース。毎月研究例会を開催され、この1月で65回を数えました。▼先に触れた『日本英学史学会報』No.108、西岡淑雄先生による巻頭エッセイ「古新聞の山に囲まれて」では、CD-ROMなどの記事検索だけでは得られない広告など、新聞情報の大切さに触れられています。納得。（馬）

日本英学史学会 中国・四国支部ニューズレター No.45
2006年1月12日発行
発行 日本英学史学会中国・四国支部（代表 竹中龍範）
事務局 〒727-0023 広島県庄原市七塚町562 県立広島大学
馬本研究室内 電話&FAX: (0824) 74-1725 (直通)
e-mail: umamoto@pu-hiroshima.ac.jp
ホームページ: <http://tom.edisc.jp/eigaku/>